柿の木

こぐまじゅんこ

ぼくの家の庭には、大きな柿の木がある。
なんでも、ぼくのおばあちゃんが生まれた年に植えられたものらしい。
おばあちゃんは、昨年、亡くなったから、柿の木は、おばあちゃんより
長生きしている。
ぼくは、この柿が大好きだ。
５月頃、緑のかわいい木の芽がではじめ、そうして、小さな青い柿の
赤ちゃんが生まれる頃から、ぼくは、秋が待ち遠しくてたまらない。
夏休みも終わり、運動会の練習をしていると、そろそろかなぁ・・・、
なんて、そわそわしてくる。
やがて、山が、赤や黄色に衣替えし始めた頃、柿の実も
赤く熟れてきた。
毎年、じいちゃんが、柿の木に登って、柿をとってくれるのだが、
今年は、じいちゃんが体を壊して寝込んでしまった。
お父さんは、メタボだから、柿の木には登れない。
だったら、ぼくが柿をとろう。
ぼくは、はりきって、柿の木の下に行った。
見上げると、ちょっとこわい。
でも、ぼくがやらないと柿は食べられないんだ。
そんなのは、嫌だ。
ぼくは、柿の木に抱きついた。
足をふんばって、登っていく。
なんとか枝にたどりついた。
柿をもぎっていく。１こ、２こ、３こ・・・。
とりだすと楽しい。腰に巻いた籠にいれていく。
思ったより、たくさんとれた。
柿の木から景色をながめると、遠くの街まで見えた。
風がほほをすりぬけていく。
気持ちいい。
しばらく、ぼーっとしていた。
そして、ゆっくりおりていくと、早速、お母さんに、柿をむいて
もらって食べた。
今年の柿も、やっぱり甘くておいしい。
ぼくは、おなかいっぱいになるまでバクバク食べた。